

<私の>素描展Ⅳ

The message from

Y. KAZUKO

Museum of Misumi

～美術館からのメッセージ～

平成13年 2月3日(土)
～5月27日(日)

海外旅行を試みているのは 地方在住のため、
仕事が独善的になり 小さくまとまる懸念がある。
できるだけ横着な仕事をしたいと 思うようになったからであろう。

－ 香月泰男 －

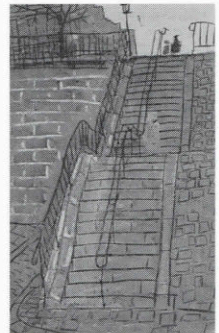
<私の> 素描展Ⅳ (旅の水彩素描・外国編)

1956年(昭和31年)年秋に初めて渡欧した香月泰男は、その時すでに45歳、絵描きとしては随分出足の遅い渡欧である。日本敗戦までの時代相を見れば無理もないことだが、それにしてもシベリヤから帰って十年になろうかというのにどこにも出かける気もない、根っからの家庭人であった。絵のモチーフは身近に無数にあるという信条も、家庭人の根を育むこの上ない肥料となる。

梅原龍三郎と共に香月の才能を逸早く見出した福島繁太郎の強い勧めで米俵を上げた香月である。仮にこの誘いがなかったら、他日気が変わって海外に出る日があったとしても旅の作品の数は知れたものであろう。

最初の渡欧以後、晩年は年中行事のように海外に向かう変貌ぶりには驚かされるが、家庭人でなくなったわけではない。次のような文が残っている。『ギリシャの旅が終わって今ほっとしているところ。今更ながら三隅のわが家の良さを味わっているところ。何を好きこのんで一ヶ月も旅に出たかを考えなおしているところである。それでもまだ、私のスケジュールには今秋十一月スペイン、モロッコへの旅があるし、来春はマダガスカル島へ行く計画が(後略)』

この変貌によってわれわれは今香月の視野の中で海外各地に触れている。東洋水墨画に素描の真髄を見つけた人がいかに水彩を生かして異国の風土や人を捉えたか。いかに簡潔明快に描いたか。それを知る楽しさは素描を見た者のみの特権であろうか。



バリ(7) 50.0×32.5
1956年



グランカナリヤ JUAN GRANDEの教会
45.4×30.3 1972年

俳句

清風句会

短歌

三隅短歌会

(順不同)

町民文芸

幾星霜句に語りつぐ若菜かな
風雪に耐えて若菜の天を向く
新世紀味優先の柑を植え
小さき会なれど楽しき初句会
山茶花の気遣ふほどに乱れ咲き
水仙や迷える途に日を点す
初夢に已年万札降ってわく
朝市のバックの若菜買い戻る
初句会恩師交えて酒の宴
孫来たる財布ふるいてお年玉
初句会語って居れば夕暮れる
あどけない無心地蔵に餅飾り
初句会呑む程に出る国なまり
一筆に心を重ね賀状書く
着ぶくれて大正生まれ口達者

高崎はま子
しょうどう
岩本さつき
河畑ツル子
こうしゅん
長沼 康子
沖村美智子
青海賀代子
大谷 つね
森田 春一
松田 妙子
仁保 民子
潮田うしほ
西村美千代
富田佳津美

恙なく帰りゆけよと祈りつつ娘
らの車を消ゆるまで見つ
昨日けふ落ちつくしたる銀杏葉
の朝のしめりを踏みて詣でぬ
しんなりとなりし大根塩さとう
こぶまぜ糠とたるにつけこむ
祈りつゝ点眼すれど吾が視野は
狭まりゆくと医師に告げらる
来る年の夫が健康祈りつつ箸紙
に名を書く大晦日
眠るごと静かな家並み人気なく
物音もなき元旦の朝
ひ孫らも集いて祝う誕生日蠟燭
消す父頬ふくらませ
新調の小紋の着物もはれぐと
初釜の席に一服の味

吉村 恵子
岡 松子
白井 麻子
古屋 博子
山中 敬子
上田 愛子
河村 民子
松野美津子

